

外国語科におけるやり取りを継続・発展させ、自分の考えを広げ深められる生徒の育成

—即興への橋渡しとなる学習過程、学習形態、学習支援の工夫を通して—

登米市立中田中学校 堀内 雄太郎

1 授業づくりに関わる課題

これまでの授業実践では、話すこと〔やり取り〕の活動をする際、単調な一問一答形式になってしまったり、教科書等のモデル文を示さない場面でのペア活動が困難であったりするという課題があった。以下は5月に行った意識調査の結果である。

表1 意識調査（令和7年5月実施 n=33）

やり取りに関する質問	*人数	できていると感じる主な理由
①正確に話そうとしていますか。	24	ノートを見直して大事な言葉を使って話している。
②相手のことを考えて話していますか。	20	相手が聞き取れるようなスピードで話したり、リアクションを大きくしたりしている。
③習ったことを活用して話していますか。	19	習ったことを活用することでこれまでの復習になる。
④自分のことが伝わるように話していますか。	16	話したことを理解してもらいたい。
⑤会話を続けようとしていますか。	14	会話が止まらないように、何かしらの反応はするようにしている。
⑥間違いを恐れずに話していますか。	7	間違えてしまっても、その方がその表現をよく覚えられる。

*：肯定的な回答をした人数

やり取りの際に「正確に話そうとしていますか」という質問に対して肯定的に回答した生徒は全体の約7割であり、多くの生徒が文法的な正確さを重視する傾向がある。一方で、「間違いを恐れずに話していますか」という質問に対して肯定的に回答する生徒は、学級の5人に1人程度であり、質問の中で最も低い割合となった。「会話を続けようとしていますか」に対して肯定的に回答した生徒は、約4割にとどまった。普段の授業の様子からも、自分の考えや思いを伝える際に、相手に伝わるように分かりやすい語句を使ったり、質問やリアクションを返して会話をつなげたりする意識が、十分に備わっていないという実態が見られる。

2 研究の目的と方法

(1) 研究主題の定義と目指す生徒像

研究主題の文言は、以下のように捉える。

「広げる」とは、「知識・技能を、実際の英語でのやり取りで活用すること」、「深める」とは、「思考・判断・表現を繰り返しながら、考えを明確にしてい

くこと」とする。以上を踏まえ、目指す生徒像を「やり取りを通して、自分の考えを整理し、知識・技能を活用しながら、思考・判断・表現を繰り返して、相手に伝えることができる生徒」とする。

(2) 研究の手立て

研究の目的を達成するため、下記の3つの手立てを講じていく。

① 「型」を始めとする段階的な学習過程

単元の新出表現等を「型」として学習することを始めとし、徐々に自分の考えに置き換えていく活動を段階的に行う。既習の「型」の確実な定着を図った後、最終的には「型」に重ねられるような類似のテーマにおける言語活動の場面を設定し、自信を持たせた状態で、即興につながるようなやり取りに挑戦させる。言語活動を行う際には、教師がモデル会話で、意図的に単語一語やジェスチャーで伝えたり、つなぎ言葉や質問を入れたりして、生徒に自然な流れでやり取りを継続するイメージをつかませる。

② トリオ活動を取り入れた学習形態

やり取りを行う際の学習形態としてトリオ活動を取り入れ、協働の効果を高める。つなげる役の生徒には、会話の中で相づちや感想を述べるように働き掛ける。それぞれが「質問する」「答える」「つなげる」という役割を経験し、相手の表現を学びながら自分の表現力を高めていく。また、役割をローテーションしながら繰り返し同じテーマで活動することで、やり取りへの緊張感や負担感を減らし、安心して楽しく活動できるようにする。

③ 学びの成長を把握する学習支援

やり取りの活動をする際に、生徒は自分の学びの足跡を記録できる学習シート（以下、Bookmarkシート）を持ち歩き、互いにやり取りの成果を確認し合う。やり取りを継続・発展させることを意識できるように、Bookmarkシートに「相づち」、「質問」、「感想」というチェック項目を入れておく。

また、タブレット端末で相づちや質問、感想に関する既習表現を「型」として共有し、生徒はそこから自由に使いたい表現を選べるようにしておく。

活動後に自分ができていることや苦手なことを視覚的に把握し、やり取りで自分の考えを広げ深めるための課題を自覚した上で、次の活動への目標を再認識させる。教師はパフォーマンステスト前に全員のBookmarkシートの記録を確認することで、個への指導・支援に役立てる。

3 授業実践 I

(1) 単元名

「Unit 3 What kind of job are you interested in?」

（東京書籍 NEW HORIZON English Course 2）

(2) 単元の目標

働くことへの興味・関心を持ち、自分の夢の実現に向けて大切なことや、今やるべきことなどについて、簡単な語句や文を用いて伝え合うことができる。

(3) 本時（4/10）の目標

自分自身の職場体験の経験について伝えたり、相手に職場体験に関する質問をしたりすることができる。

(4) 研究に関わる手立て

① 「型」を始めとする段階的な学習過程

単元の新出表現等（例：You can experience the job of a nursery school teacher. I chose the school because I like small children.）を「型」として、自分の考え（例：I experienced a supermarket staff. I chose it because I like shopping.）に置き換えさせる。様々な級友と繰り返しやり取りを行い、既習の「型」の定着を図る。その際、相づちを意識させたり質問を取り入れさせたりと、一回ごとに活動のポイントを示しながら行う。その後、類似のテーマにおける言語活動に挑戦させ、即興への橋渡しにつながる。

② トリオ活動を取り入れた学習形態

やり取りをする際の学習形態にトリオ活動を取り入れ、協働の効果を高める。本時では、つなげる役の生徒に、質問を1回以上し、相づちや感想を述べて会話をつなげるという役割を与える。モデル会話の際に、教師が話す順番や関連する質問をする流れを具体的に強調して伝え、生徒が自分で気付くように導いていく。

③ 学びの成長を把握する学習支援

Part 1（体験した仕事）とPart 2（体験先を選んだ理由）のテーマについて伝えたり、質問したりさせる。級友と協働で対話に取り組み、繰り返し話したり、質問をしたりしながら、伝わりやすい、継続性のあるやり取りを広げ深めていく。その過程や成果をBookmarkシートに記録して、自身の学習状況を把握し、単元のゴール達成に向けた見通しを明確にする。

(5) 成果と課題（○：成果 ●：課題）

① 「型」を始めとする段階的な学習過程について

○ 教科書の本文を自分自身の考えに置き換えていくことに慣れると、生徒は教科書の表現を活用して、以前より安心感を持ち、間違いを恐れずに、やり取りを継続できるようになってきた。

● 一部の生徒にとっては読む活動、暗記をする活動になってしまっていた。手元でキーワードを確

認しながら相手の顔を見て話すなど、具体的な姿を、教師がモデルとして示していく必要がある。

② トリオ練習を取り入れた学習形態について

○ トリオの動きが生徒に浸透すると、個人の緊張感や負担感が減り、以前よりも楽しみながら活動に取り組めるようになった。やり取りを継続・発展させるための素地となる学習形態として有効であった。

● つなげる役の生徒が相づちを打つことしか行っていないなど、不自然な会話になる場面が見られた。場面によっては役割に固着することなく、より自然なやり取りで互いの考えを広げ深めていけるような働き掛けを行っていく。

● 生徒が、自分が使用した表現を自ら修正しながらやり取りを繰り返していけるように、トリオを入れ替えながらやり取りを練習する場面、教師による見取りを伝える場面、生徒同士で評価し合う場面、更に生徒個人で自分のことを評価する場面を増やしていく必要性があった。

③ 学びの成長を把握する学習支援について

○ 毎時間の学習の成果をBookmarkシートに記録し、それを見返したり級友と共有したりすることで、生徒個人の自己調整、生徒同士の他者参照、教師の指導・支援に生かすことができた。

● やり取りの途中で記録を書く時間を設定したことで、活動が途中で止まってしまうことがあった。記入は最後にまとめるなどして、話す時間をより十分に確保できるようにする必要があった。

● 生徒がよく使う質問、感想に関する表現を個人ごとのBookmarkシートにまとめさせたため、学びが個人内にとどまっていた。良い表現や工夫した点を全体で共有すれば、やりとりの更なる継続・発展につながると考える。

4 授業実践 II

(1) 単元名

「Unit 5 What design is good for everyone?」

（東京書籍 NEW HORIZON English Course 2）

(2) 単元の目標

多様な人々と共に生きる社会の一員としての自覚を深められるように、誰もが暮らしやすい社会について考え、その方法などについての自分の考えや提案を英語で表現し、簡単な語句や文を用いて伝え合うことができる。

(3) 本時（4/10）の目標

誰もが暮らしやすい社会について考えるため、身近で便利だと感じるユニバーサルデザイン（以下、UD）について自分の意見を整理し、簡単な語句や文を用いて感想を述べ合ったり、それについて質問・応答したりできる。

(4) 研究に関わる手立て

① 「型」を始めとする段階的な学習過程

単元の新出表現等（例：Thanks to their shape, you can cut the paper easily.）を「型」として、自分の考え（例：Thanks to the bump, I can find the shampoo easily.）に置き換えさせる。これまでの単元の学習で身に付けた既習の「型」も活用するように働き掛け、繰り返し「型」を使用しながら、生徒が表現できる範囲を徐々に拡大していく。また、手元でキーワードを確認しながら相手の顔を見て話す姿を、教師がモデルとして示し、生徒に気付かせる。

② トリオ活動を取り入れた学習形態

トリオで、「質問する」「答える」「つなげる」という3つの役割をローテーションしながら繰り返し、相手の表現を学び、自らの表現力を高めていく。個人の発話への心理的負担を軽減し、失敗しても互いにフォローし合える安心感を持たせ、やり取りの継続性を高め、自分の考えを広げやすくしていく。また、つなげる役を生徒に、役割にこだわり過ぎず自然なやり取りをする姿を具体的に強調して示し、生徒自ら気付くように導いていく。練習を繰り返して、ある程度自信がついたトリオは、教師の前でやり取りをする。その際、教師が各トリオの会話内容、英語使用レベルや学習意欲を踏まえた質問を行い、考えを深める発話を促しながら即興的なやり取りにつなげ、自分の考えを深めさせていく。

③ 学びの成長を把握する学習支援

Part 1（身近なUD）とPart 2（Part 1のUDの工夫点）のテーマについて伝えたり、質問したりする。学級内でよく使われている表現をタブレット端末上で共有することで、他者参照を促し、それぞれの表現を活用しやすくする。授業の最後には、本時のやり取りの成果や課題をBookmarkシートに記録させ、振り返りをタブレット端末に入力・提出させる。できていることや苦手なことを視覚的に把握させ、やり取りで自分の考えをより広げ深めるための課題を自覚できるようにさせる。

(5) 成果と課題（○：成果 ●：課題）

① 「型」を始めとする段階的な学習過程

○ 「型」の表現を繰り返し活用させることで、生徒は既習表現を自然に、円滑に用いることができた。その結果、多くの生徒が発話の流れを途切れさせずにやり取りを継続することができ、やり取りの継続性が向上した。また、「型」の定型表現を繰り返し用いることで、発話に対する心理的負担が軽減され、安心感や自信を持って自分の考えを発信できるようになってきた。

○ 写真やイラストを基に、キーワードを確認しながら相手の顔を見て、場面に応じた会話に取り組めるようになってきた。

● 「型」に依存し、正確に発話しようとする意識を持ち過ぎてしまい、即興的な発話の展開が難し

くなる場面があった。その結果、手元でキーワードを確認しながらスムーズにやり取りが行われているように見えても、実際には、やり取りの内容が単調になり、流れが形式的で不自然になってしまっていた。

② トリオ練習を取り入れた学習形態

○ ペア活動に比べて負担感が軽減され、練習や教師からの質問において、安心感を持って楽しさや達成感を感じながら、また、質問に対しては協力や相談をしながら、意欲的にやり取りを継続している生徒の姿が多く見られた。また、「型」を活用しながらトリオで会話を行うことで、会話が途切れにくくなった。

○ 生徒の会話内容や英語使用レベル、学習意欲を踏まえながら、教師がやり取りの中で質問を行い、生徒の考えを深める発話へつなげることができた。

● 「つなげる役」の生徒の役割が依然として明確化しきれていなかった。やり取りを更に継続・発展させることができる可能性があるため、今後も改善を重ねていくことが大切である。

● 教師が行う質問は、生徒が自分の考えを深めるうえで有効であったが、適切な質問を即興的に選択することが難しかった。生徒の英語力や考えの深まりに即した質問の精選について、更なる検討が必要である。

③ 学びの成長を把握する学習支援について

○ Bookmarkシートの内容項目を改善したことで、生徒がやり取りの成果を以前よりも精選して記録・整理できるようになった。生徒は、記録内容を活用した自己調整や他者参照を通して、課題や改善点を具体的に認識することができた。

○ 教師は単元学習の途中やパフォーマンステスト前に全員のBookmarkシートと振り返りの記録を確認することで、生徒一人一人の学習状況や習熟度を把握し、個に応じた指導や支援に生かすことができた。

● Bookmarkシートの記入の際、「しっかり」「頑張る」といった抽象的な表現を使用してしまう生徒がいた。教師が導入時や授業後の添削の際に、「単語だけでもよいか」「相手から聞こえた単語を繰り返し」といった具体的な表現に変換して示すことで、生徒が会話を続けるイメージを明確に持てるようにする。

5 まとめ

(1) 研究の成果

授業実践Ⅱの後に意識調査を行った。「教科書や他の人の表現を参考にして、新しい考えや言い方を見付けることができましたか」という質問に、8割以上の生徒が肯定的な回答をしていた（表2）。

表2 意識調査（令和7年10月（授業実践Ⅱ後）実施 n=33）

質問【単位：人】	◎	○	△	×
◎とてもそう思う ○そう思う △あまり思わない ×思わない				
教科書や他の人の表現を参考にして、新しい考えや言い方を見付けることができましたか。	12	17	4	0

「型」の段階的な学習やトリオ活動等が、生徒の考えの広がりや深まりを支える一助となっていると考える。

表3は、5月の授業実践Ⅰ前に行った実態調査と同様の質問項目に対する回答結果である。依然として多くの生徒が「正確に話そうとしている」と回答している。その理由として、「タブレット端末を見て確認しながら話している」という内容の回答が多かった。授業実践Ⅰ後から継続してきた、タブレット端末で既習表現を共有し必要時に参照できる環境づくりは、正確に表現しようとする生徒の緊張や不安を軽減し、情意面での支えとなっている。その結果、やり取りが継続・発展しやすくなり、生徒が自分の考えを広げたり深めたりするための表現選択の基盤として機能している。一方、「間違いを恐れずに話している」の項目は5月と同様に肯定的な回答数が6つの項目の中で最も低かった。その理由としては、「まだ理解していない単語や文があるから」といった学習への前向きな回答が多くなり、「自分の英語に自信がない」といった消極的な理由は減少した。また、顕著な増加があった項目は、「自分のことを伝えようとしている（項目④）」、「会話を続けようとしている（項目⑤）」で、単元の新出表現等の「型」を基に伝えたい内容を組み立てたり、タブレット端末で表現を補ったりして、積極的に質問やリアクションを返す姿が見られるようになった。これらの結果から、「型」を基盤とした学習過程とタブレット端末による学習支援が、生徒の安心感を高めつつ、やり取りの継続と発展を支えていると考える。

表3 意識調査（令和7年10月（授業実践Ⅱ後）実施 n=33）

やり取りに関する質問	*人数	できていると感じる理由 下線部…研究と関連した部分
①正確に話そうとしていますか。	18 (-6)	タブレット端末を見て確認しながら話している。
②相手のことを考えて話していますか。	17 (-3)	相手の目を見て、伝わるように考えて話している。
③習ったことを活用して話していますか。	21 (+2)	習ったことを活用すると相手にうまく伝わる。
④自分のことが伝わるように話していますか。	20 (+4)	何となくでも伝わるように話している。
⑤会話を続けようとしていますか。	21 (+7)	感想や質問など、習ったことを活用している。
⑥間違いを恐れずに話していますか。	8 (+1)	失敗してもいいから、今までに学んだ単語や文章を使っている。

*：肯定的な回答数、()内の数値は5月からの増減

トリオ活動については、多数の生徒が肯定的に評価しており、その学習効果を確認することができた。以下は、トリオ活動における自由記述である。(表4)

表4 意識調査（令和7年10月（授業実践Ⅱ後）実施 n=33）

質問：トリオ活動で楽しかったこと、うまくいったことを教えてください。
<ul style="list-style-type: none"> ・3人いるのでいろんな表現が出てきて楽しく会話できた。 ・会話を続ける役の人がいるから、会話につながる。 ・相づちをしてもらったり、したりして楽しかった。 ・相づちをうまく使えた。相手の目を見て話すことができた。 ・分からない所を、共有して教え合うことができた。 ・3人いると緊張しないし、あまりかじこまらなくてもいい。 ・回数を重ねるごとに上達を感じられた。

これらの回答から、トリオ活動でのやり取りは、緊張感が和らいだ中で協働的に学ぶことができ、教師や生徒同士で見取りながら繰り返し活動することで互いの考えを広げることにつながったと考える。

また、教師がトリオのやり取りに参加して質問することで、生徒は思考・判断・表現を繰り返しながら考えを整理し、より明確にしていくことができた。この点から、トリオ活動は、自分の考えを深めるための手立てとして効果的であったと考えられる。

(2) 今後の課題

やり取りをさまざまな級友とトリオになって繰り返す場面では、活動に戸惑う生徒の姿が見られることもあった。学習習熟度が上位・中位・下位それぞれの層の生徒の姿を想定し、単元全体を通して、場面や状況に応じた指導の工夫や活動量と定着の度合いとのバランスを意識した指導が必要である。

意識調査で消極的な回答をした生徒は、十分に表現力が身に付いていない、またはやり取りを通した自分の考えの広がりや深まりをまだ実感できていないと考えられる。一方、そのような生徒たちから、「途切れず話せるようになったので、もっとスムーズにやり取りができるようになりたい」といった前向きな声を聞くことができた。「できるようになりたい」という意欲を丁寧を受け止め、個に応じた支援を継続し、どの生徒も自信を持ってやり取りに取り組めるようにしていくことが重要である。

肯定的な意識を持っている生徒に対しては、自分の考えをより広げ深めるため、単元の「型」を活用するだけでなく、それを足場として自分の言葉で表現を創造する活動を更に充実させる必要がある。また、トリオ活動の質を高め、互いの意見をより円滑にやり取りしながら、新たな表現の仕方を習得していけるような手立てを工夫していく。

今後も、生徒一人一人の学習意欲や成長段階に応じた指導と支援を通して、生徒が自分の考えを広げ深められる授業の実践を目指していく。

【引用・参考文献】

- 1) 文部科学省（2017）「中学校学習指導要領（平成29年告知）外国語活動・外国語編」
- 2) 国立教育政策研究所（2020）『指導と評価の一体化』のための学習評価に関する参考資料」東洋館出版社